

雲居雁創造

菊 永 郁 子

序

『源氏物語』にはさまざまな女性が登場するが、その中で雲居雁は、際立って優れた女性ではない。平安時代の貴族社会において、理想的な女性であるとは言い難く、むしろ平凡な女性でさえある。だが雲居雁の人生を眺めてみると、『源氏物語』中の女性の中では幸せな女性の一人として数えることができる。また、平安時代の一夫多妻制のもとでは、夫の浮気を黙認するような妻が理想とされたが、雲居雁は、夫の浮気に耐え忍ぶような柔順な妻ではなく、夫のもとに來た手紙を奪い取ったりする。だがそれは、自分の感情に従った、素直な行為でもあり、その点で、雲居雁に、現代の女性に通じるものを感じる。そのような雲居雁像を少女期の「心効」き人から「強くものしたまふ」本妻までの姿を辿りながら、その物語上の位置づけを試みてみたい。そうすることで、作者紫式部が、雲居雁像を創造

した意図も明らかにすることができるのではないかと思うのである。

一

雲居雁が『源氏物語』に登場するのは、少女巻からである。雲居雁の実母は皇族出身で、血筋の尊さは正妻腹の弘徽殿女御にもひけをとらない。しかし内大臣は、雲居雁を、姉娘の弘徽殿女御に比べはるかに軽く思っており、その養育を大宮に任せていた。このように雲居雁は、母親は多家に再縁し、父親からもあまり顧みられることのない、頼りない存在として登場する。

まだ片生かたおひなる手の、生おひ先さきうつくしきにて、書きかはしたまへる文ふみどももの、心をこころさなく、おのづから落ち散るををりあるを、……（「少女」P106）

少女期の雲居雁に関する描写をみると、「うつくし」

「幼げ」「心をさなく」といった語が目立ち、無邪気で子供っぽく、かわいらしい姿が浮かび上がってくる。雲居雁は、容姿など表面的なものだけでなく、内面的なものや行動においても、「うつくしく」「幼げ」である。例えば、

内大臣に夕霧との仲を知られた時、雲居雁は、内大臣や乳母達に騒がれたのを恥ずかしく思うだけで、これからの自分の身の上のことや、世間がどのように思うかなど、深く考えたりはしない。また、二人の関係が、これほどまで人に取り沙汰される一大事だとも思わない位、幼い心の持ち主である。だからこそ、容易に人に見られてはならない、恋人とのやりとりの手紙を、無用心にもつい落としてしまい、女房に見られるという失態を演じたりする。しかしこの姫君の幼さは憎めないものであり、乳母達の目を盗んで「さるべき隙」(「少女」P11⁹)を作ることで「おとなびたる人」(同上)ではないところが初初しくもある。そしてこの幼さや初初しさの描写は、雲居雁と夕霧との幼な恋の美しい世界に読者を誘いこむ役割を果たしているのである。

少女巻以後、常夏巻に雲居雁についての描写がある。この頃雲居雁は十七歳。少女巻から約三年の月日が流れているが、「らうたげ」という形容動詞が使われており、可憐

でかわいらしく、小柄な体付きの雲居雁の姿が想像される。外見は少女の頃と同じように愛らしいままであるが、内面には少し変化が見られる。

「昔は何ごとも、深くも思ひ知らで、……」と、今ぞ、思ひ出づるに、胸ふたがりていみじく恥づかしき。(常夏[P49])

以前は夕霧との仲を騒がれたことを恥ずかしく思うだけであった雲居雁が、その頃の自分を省みて、「何事にも思慮分別がなかった」と考えるようになり、自分の将来について深く考えることもできなかつた幼い少女が、自己を見つめることが出来るまでになったのである。また、娘を愛おしく思い、その幸せを願う父親の気持ちを探し、それに気がねして大宮のもとへ出向くこともできない。以前なら雲居雁は「いと幼げなる御さま」(「少女」P11⁶)で、内大臣がさまざまに話してきかせても「かひあるべきにもあらねば」(同上)という有様だったので、内大臣が涙ぐむほどであったが、ここでは父親の心情をくみとることができるようになっている。三年間で雲居雁の心は成長したといえる。この成長の要因としては、雲居雁が祖母大宮のもとから父内大臣の邸へひき取られたことが考えられる。自分の

ことを最も慈しんでくれた大宮や恋しい夕霧と引き離された雲居雁は、そのために次第に自分をとりまく状況を理解していったのではないだろうか。何故あれほど夕霧との仲を騒がれたのか、何故父が自分を夕霧から遠ざけようとしたのか、あるいは藤氏（左大臣家）の長としての内大臣の立場や、父親として娘の幸福を願う内大臣の思い、それらが少しずつ分かるようになっていったのだと思われる。また、夕霧への想いがどういうものか、自分の内面を見つめ直すこともできた。愛する者との別離・孤独が、雲居雁に、冷静に周囲の人々との関係や人々の思惑などを考慮させることを可能にしたと考えられる。だが、成長したとはいうものの、貴族の娘、女性としての嗜みや心掛けが十分であるとはいえない。相変わらず不用意なところがあり、昼寝していたところを内大臣に戒められたりする。ただ、この昼寝に関する描写は、単に雲居雁の嗜みに欠ける点を述べたためものではない。『紫式部日記』に、紫式部が弁宰相の君の昼寝姿を見て「いとらうたげになまめかし」と思っている。「物語の女の心地もし給へるかな」と言う記述がある。紫式部は、池田龜鑑氏が述べておられるように「美女のかり寝に、物語的世界を見出す一貫した態度をとつて」おり、雲居雁の昼寝姿も、彼女の愛らしさ、美しさを表現するために描かれたのだともいえる。

梅枝巻で源氏が明石の姫君（十一歳）の入内の準備を進めている頃、雲居雁ははや二十歳である。

女も、常よりことに大臣の思ひ嘆きたまへる御気色に、恥づかしう、うき身と思し沈めど、上はつれなくおほどかにて、ながめ過ぐしたまふ。（梅枝）
P201

中務宮の姫君と夕霧との縁談の噂を聞いた内大臣は、ますます雲居雁と夕霧とのことで心を痛める。その様子を見て、雲居雁は、我が身を悲観しながらも、父親の気持ちを気遣ってか、周りの者に対する配慮からか、表面はおつとりと構えている。常夏巻において心の成長のみられた雲居雁は、ここでも父親や周囲の者に気を配った振舞をしている。

雲居雁と夕霧との幼な恋は、藤裏葉巻でやっと成就する。この時雲居雁は二十歳、夕霧は十八歳、六年ぶりに対面した雲居雁は、もう「片なり」（「少女」P123）ではなく、何一つ不足するところのない見事な姫君に成長している。それでもやはり、「いと児めきたり」（「藤裏葉」P213）という表現があるように、雲居雁は、美しく成長した二十歳の女性であると同時に、十四歳の頃のようなあどけなさも残る、かわいらしい娘君でもある。

ここまでの雲居雁の描写には、「うつくしげ」「らうたげ」「幼げ」「児めかし」などの表現が目立つ。格別に美しくはないが、かわいらしい存在として描かれ、二十歳になっても幼さが感じられるのが雲居雁の特徴である。

二

このようにかわいらしい雲居雁の様子にも、結婚後は変化が見られる。

わが御仲の、うち気色ばみたる思ひやりもなくて、睦むつびそめたる年月のほどを数ふるに、あはれに、いとかう押し立ちておごりならひたまへるもことわりにおぼえたまひけり。(横笛¹⁶⁸)

この頃夕霧は二十八歳、雲居雁は三十歳、結婚して十年を経過している。子供もたくさんでき、雲居雁は夫の浮氣に悩まされることもなく、正妻として平穩無事に過ごしてきた。そんな雲居雁が、我を張り、高慢な態度をとるのが習慣になっているのもっともだ、と夕霧は考える。また、

子どもあつかひを暇いとまなく次々したまへば、をかしきところもなくおぼゆ。(若葉下¹⁶¹)

これも夕霧の雲居雁に対する感想である。雲居雁は、次々と子供を育てていくうちに家庭の日常生活の中に埋没・安住するようになり、夫の目から見ると、女性としての魅力を失い色あせた、何の風情もない、所帯じみた主婦になつてしまつていた。この約二年後、横笛巻でも、雲居雁は子育てに一生懸命で、かいがいしく子供たちの世話をするたくましい母親として描かれる。しかし、胸をあけて若君にお乳を含ませる姿を見られるのを恥ずかしがり、夕霧に「憎からず」と思われる雲居雁は、母親らしい貫禄がついたとはいえ、なりふり構わずというのではなく、夫の視線を気にするかわいい女性である。

また雲居雁は、一条御息所に忠告する祈禱の律師から、「本妻ほんさい強つよくものしたまふ」(夕霧¹¹⁴)と評される。致仕の大おん臣(かつての内大臣)家の権勢や、大勢の子供を持つ本妻に対して、たとえ朱雀院の第二皇女といえども、何の力もない落葉の宮ではとても対抗できまい、と律師は述べる。この言葉から、雲居雁が、夕霧の北の方としていかに確固たる地位を築いていたか分かる。少女巻では頼りない存在だった雲居雁が、皇女を凌ぐ勢いを持つに至る。結婚後約十一年の間強力なライバルも現れず、正妻の座に安住した生活が、雲居雁を「強く」したと考えられる。また、母親であり、多くの子供を育てることが、彼女をたくまし

い女性に成長させた原因の一つである。正妻としての自信、誇り、夫への信頼、母親としての強み、それらが雲居雁を、先の評価を受ける程の女性に成長させたのだ。さらに雲居雁が「強くものしたまふ」ことのできる背景には、致仕の大臣家の権勢が考えられる。これは、後に雲居雁が実家に戻ることの伏線とも考えられるのだが、仮に雲居雁が、頼りとする夕霧を失っても、雲居雁を経済的に援助できる致仕の大臣家という後ろ楯がある。それが、雲居雁の本妻としての地位や勢力を補強するものとなっている。

紫式部が、雲居雁を「心幼」き少女から「強くものしたまふ」本妻に成長させた構想の展開には、夫の浮気に抵抗する女性として雲居雁を描くという意図があつたからだと見てとれる。

三

雲居雁の嫉妬する姿が印象的に描かれるのは、夕霧巻で一条御息所から夕霧への手紙を雲居雁が背後から忍び寄り奪い取る場面である。これは貴婦人のすることではなく、優雅さなど微塵も感じさせない、品のない振舞だ。平安時代の一夫多妻制のもとでは、夫の浮気に対してあからさまに嫉妬したりせず、夫の心が直るのを穏やかに耐え忍んで待つ妻こそ、思慮分別のある奥ゆかしい女性だと考えられ

ていた。嫉妬する妻は厭われるものであり、この男からみた女のあり方としては、雲居雁の行為は好ましくないということになる。しかし、嫉妬という人間の自然な感情が、素直に表れた行為であるといえる。

雲居雁が手紙を奪うことや、この夫婦のいさかいは、庶民と何ら変わるところのない、さらには現代の夫婦喧嘩にも似た普遍的なものである。雲居雁という女性を身近な存在のように感じるのは、このためでもある。

手紙を奪った雲居雁は、それが花散里からのものだという夫の口車に容易に乗せられる。その上、手紙を奪ったのを愚かなことだと反省するなど、雲居雁は単純で素直な性格の持ち主である。

また雲居雁は、深沢三千男氏が述べられているように「気持を内攻させず、あからさまにさらけ出すタイプのよう」で、嫉妬心を胸中に秘めじつと耐えることのできない性格である。それに、妻の嫉妬は夫の嫌うものであるから穏やかに構えているのがよい、という夫の浮気に対する上手な対応の仕方にも心得ていない。そのため夕霧と落葉の宮の件に我慢できなくなり、夕霧に言いたい放題不満をぶちまけたりする。だが、その姿には愛敬があり、言葉を重ねれば重ねるほどかわいらしさが増していく。雲居雁の嫉妬のさまは、彼女の魅力的な姿として描かれるのが特徴的で

ある。また、その描写に「いと若やかに心うつくしうらうら
たき心」(「夕霧」P159)とあるように、雲居雁の子供のよう
に素直な、反面心の浅い人柄が強調されている。

そのような雲居雁は、どこかで夕霧を信頼していたが、
ついに夕霧は落葉の宮と結ばれ婚儀を行う。そこで雲居雁
は、こうなつてはおしまいだと性急に判断を下し、「野暮
な正真面男には、歯止めがなく、とことん行くところまで
行つてしまふものだ」という通念⁵」に基づく「悲観的判断」⁶
と、「これ以上夫になめられたくない」という意地から、
熟慮せずに実家に戻つてしまふ。驚いた夕霧は、

いと急にものしたまふ本性なり。……かくかたくなしう
軽々^{かろが}しの世や(「夕霧」P166)

と雲居雁を非難する。この夕霧の批評からも分かるように、
雲居雁は、父大臣に似たのか、「結論を急ぐたち」というか、
どつちつかずの中途半端な状態が大嫌い⁸」で、派手に振舞
う性格なので、実家に戻るといふ大胆な行動をとるのであ
る。「夫婦の破綻が専ら妻の側の名譽失墜」⁹」にしかならな
い、つまり「雲井雁の、他の女を容認できぬ北の方として
のはしたなき、それに女としての至らなき故にこそ男から
棄てられるに至つたと見られる社会通念が、雲井雁のデメ

リットになる」¹⁰として、夕霧はこの行動を「言ひもていけ
ば、誰^たが名か惜しき」(「夕霧」P167)と非難する。夕霧の言
う通り、多妻制下の貴族の女性の心得に欠けるとして、結
局は雲居雁が面目を失うことになるのだろう。確かに雲居
雁の振舞は、世間体や後先のことを熟慮せぬ軽率なものど
いえる。しかしそれは、雲居雁の嫉妬や嘆きが頂点に達し、
生来の性急さから最早夫にみきりをつけており、それら自
分の感情や考えに従つて、雲居雁が素直に行動した結果で
ある。

ここで「手紙を奪う」という行為について紫の上と比較し
ながら少し考えてみたい。紫の上は、まさに理想的な、殊
に男性にとつて理想的な女性として描かれている。そのよ
うな紫の上は、明石の上からの源氏への手紙を、嫉妬心ゆ
えに敢えて見ようとしなない。愛する人のもとへ他の女性か
ら手紙が来た場合、見たいという衝動に駆られるのが本音
であろうし、紫の上にもその衝動が少しも起こらなかつた
わけではないだろう。しかし紫の上は、少女の頃から源氏
と女性達との関係を見聞きして馴れており、源氏の女性観
による望ましい女性となるべく育てられている。それに、
源氏は他の女性との関係を紫の上¹¹に殊更隠そうとはしなかつ
た、などということから、手紙を奪う」という行動に出た
りはしなかつたのではないか。それに対して雲居雁は、十

一年間も北の方としての地位を揺さぶられることなく、「押し立ちておごりならひたま」うので、手紙を奪う」という強硬な手段を取ったのであろう。あるいは、父大臣の勝ち気で気丈な性格が、娘の雲居雁にもうけつがれたためとも考えられる。また雲居雁は、夕霧以外の男性との恋愛経験もなく、紫の上と違って男女の機微に通じた女ではない。そのため、手紙を奪えば夕霧がどう思うか、相手の気持ちを推し測ることが出来ず、自分の感情のままに行動する単純さがある。雲居雁はこういう点で未熟であり、手紙を奪う」という行為は、心が成熟しきっていない幼さとも関係があると思われる。

雲居雁の嫉妬に関する描写を見ると、柔軟性に欠ける浅はかな判断に基づき行動する雲居雁は、単純で性急な性格であることがよく分かる。また雲居雁は、嫉妬心を内に秘めることのできない、感情をあらわにする性格である。それは、男性本位の社会通念においては否定されるものだ。金子真理子氏が述べておられるように「経済能力を持たなかっただけに、自己を主張する力が弱」かった紫の上は、嫉妬心をあらわにしないように努めた。そのような紫の上は、男性にとって殊に理想的だが、その生き方は自分の心をおし殺したものである。それに比べ雲居雁は、貴族の女性の心得や嗜みに欠け、男性にとって不都合であり非理想

的であり、未熟な女性と言える。しかし、理想的でないというのは男性本位の視点に立つ見方である。雲居雁は、夕霧や世間がどう思うかよりも自分の気持ちを大事にし、自分の感情に素直に行動することができただけなのだ。この自分の感情に従って行動するという点で、雲居雁は、紫式部が創造した理想の現代的な女性の一面を示しているとは言えないであろうか。

四

ここでは、雲居雁が夕霧と結ばれる幸せと、入内した場合の幸せを比較して考えることにより、雲居雁像を探っていくたい。

そこでまず、雲居雁が夕霧と結ばれる幸せを考えるために、夕霧がどういう人間であるか、その性格、人物像について触れてみたい。

夕霧は、元服した（十二歳）頃から既に、真面目で浮ついたところのない人物として位置づけられている。大宮は、臣下の身分の者で夕霧に勝る者はいないとほめ、朱雀院も、官位の昇進が早く、廷臣としての学識や心構え等は源氏にひけをとらないと言ってはめる。また夕霧が有能で将来も頼りになりそうな人物であるため、夕霧が独身の時に、溺愛する女三の宮との結婚を打診すればよかったと朱雀院は

後悔する。内大臣は、態度も実に落ち着きがあり堂々と

いて、学才も優れ、心がけも男らしくしっかりして、申し分ないと世間では評判のようだと思つて、源氏に至つては、我が子ながら気品高く男盛りの夕霧を見て、女ならどうして心を奪われぬはずがあらうかとまで思う。夕霧は、勉強熱心で生まれつき学問の才能もあり、世間の信望も格別に厚く、並ぶ者もない程優れた人柄である。また、気高く威儀をととのえ堂々とした風格を備えると同時に、物腰はやさしく優雅で気品高い。容貌も、誰よりも優れ格別に優美で、輝くような美しさと慕わしい魅力を兼ね具えている。その上水際だった美しさは冷泉帝よりも夕霧の方が勝る位である。十二歳で元服した夕霧を敢えて六位に叙し、大学に入学させて勉強に専念させるといふ敵しい源氏の教育方針が功を奏したのか、夕霧は、学才も秀でており誰よりも官位の昇進がはやい。

このように夕霧は、誰よりも前途有望な青年で、人柄も容姿も何一つ不足するところなく、申し分のない貴公子であつた。それに源氏の嫡男である夕霧なら、雲居雁以上の姫君との結婚も可能である。現に朱雀院が、夕霧を女三の宮の婿にどうかと考へた位だ。それに比べて雲居雁は、容貌も格別優れているのではなく、性格等も欠けるところが多い。そのような雲居雁にとつて、夕霧は、勿体ない位の

人物だといえる。

また夕霧は、作者から「ありがたきまめまめしき」(「行幸」^{P107})と皮肉めいた評価をされる程世にありがたき「まめ人」として造型される。「まめ人」夕霧は、その呼称にふさわしく、紫の上や玉鬘へ傾斜する心を反省・自制する理性を持ち、思慮深く慎重な性格でもある。

女御の御ありさまなどよりも、はなやかにめでたくあらまほしければ、……(「藤裏葉」^{P216})

夕霧は長年雲居雁のことだけを心にかけて、その想いが叶いやつと結ばれたこともあり、二人の夫婦仲は水も漏らさぬよう、その結婚生活は、冷泉帝に入内した弘徽殿女御より華やかで申し分なく、内大臣の北の方などが妬むほどであつた。落葉の宮の件を除けば、雲居雁は夫の浮気に心を痛めることもなかった。それに落葉の宮出現後も、結局北の方としての地位を失うこともなく、夕霧の正妻、多勢の子女の母親として、比較的平穩に暮らしていく。また、内大臣が、

なかなか人におされまし宮仕みやつかへよりはと思しなほる。(「藤裏葉」^{P223})

と思ひ直したように、入内すれば、帝（春宮）の寵愛をめぐむ多くの女性達との争いなど気苦労も多く、争いに敗れて惨めな思いをすることもあろう。そのように何かと気がもめる、しかも他の女性に気圧されるような後宮生活を送るよりも、やはり雲居雁は、夕霧と結ばれる方が幸せだと
言えるのではないか。

五

弘徽殿女御が立后争いに敗れると、内大臣は、雲居雁を春宮に入内させることに望みをかけた。左大臣家の後継者として一門を繁栄させるために、内大臣は何としても自分の娘を立后させたかったのだ。それに当時の人々は一般的に、入内するのは女の理想の幸せだという観念を持っており、内大臣もそう思っていた。しかし、雲居雁が入内したとして、果たして彼女は幸せになれたであろうか。

雲居雁が春宮に入内すれば、その後入内してくる源氏の娘明石の姫君と勢力争いをする事になったと思われるが、明石の姫君には源氏というこの上なく頼もしい後ろ楯がいる。栄耀栄華への道を歩む源氏の勢力は、時の左大臣などが娘の入内を憚る程である。雲居雁の父内大臣も、若い頃から源氏の強力なライバルではあるが、やはり源氏には及ばない。更に、雲居雁自身と明石の姫君との違いも大きい。

雲居雁は、せめて次の御代の皇后にと内大臣に望みを託された。つまり急擲白羽の矢を立てられたのであり、幼い頃から「后がね」として大切に養育されたのではなく、皇后たるにふさわしい教養、心ばせなどを身につけてはいない。それは、内大臣の家柄に和琴の名手が多いにも拘わらず、雲居雁が当時の教養の一つである音楽の教育さえ十分に受けてないことから分かる。

また容貌は、目加田さくを氏の種類によると「当時十世紀末にあつて、常識的な正統的美人」⁽¹²⁾に属するが、

女は、またかかろ容貌のたぐひもなかなからんと見え
たまへり。⁽¹³⁾藤裏葉^{かたち} P225

という程度で、愛らしいとはいふものの、格別に優れて美しいというほどではない。

結婚後夕霧は、才覚の無きなど雲居雁の欠点に気づく。この他前述のように雲居雁は、嗜みのなさや短慮さなど、性格等においても欠けることが多い。

それに対し、明石の姫君はどうであろうか。源氏は星占いで、国母となる娘を授かると予言される。そこで源氏は、明石の姫君を紫の上の養女とし、自らの手元において、将来の国母たるにふさわしいように愛育する。

源氏の教育方針は、特に際だつ才芸を身につけるのではなく、すべての方面に融通がきくように、そして万事につけ不案内で覚束ない思いをすることもないようにという、中庸を旨とするものであった。つまり源氏は、日向一雅氏が言われるように「女子は特技をもつ必要はない代りに、幅広い教養を身につけ、内にはしっかりとした志操を持ち、表面は穏かであるのがよい」という考えに基づき、明石の姫君には「バランスのとれた教養主義的な人格教育」を施したのである。明石の姫君は、父方も母方（明石の入道一族）も音楽に優れた資質を持つ血筋であり、その上明石の姫君の箏は、源氏自ら教育を施している。その教育は中庸を旨とするものではあったが、明石の姫君の箏の腕前は、后として十分なものと思われる。このように明石の姫君は、音楽をはじめとして「后がね」であることを念頭においた教育を受けている。

また、明石の姫君の容貌は非常に優れていて、年若い春宮が並々ならぬ美しさの姫君に執心してしまふ程である。まだ十一歳の明石の姫君は、雛人形のようにかわいらしいと同時に威厳があり、奥ゆかしい風格を備えている。

源氏自身、あらゆる面において人にぬきんでた才能の持ち主であり、紫の上も、気だて、容貌、教養、才気、気品、どれを取っても不足するところのない貴婦人である。この

ような素晴らしい二人のもとで「后がね」として育てられた明石の姫君が、申し分のない姫君であることは言うまでもない。

明石の姫君と雲居雁を比較してみると、明石の姫君の方が、女性としての魅力、后として必要な条件を十二分にそなえており、雲居雁は、とても明石の姫君に太刀打ちできないような女性ではないことが分かる。各々の後見人の勢力の強弱、本人同士の優劣など、諸々のことを考えると、雲居雁が入内していたら、後に入内してくる明石の姫君に気圧されることになったのではないかと思われる。そのようなことになり、心痛の多い、気の揉める後宮暮らしをするのであれば、后として経済的・物質的に恵まれた生活は送れるにしても、一人の女性として、本当に幸せと言えるかどうか疑問である。「后がね」として教育されてもおらず、容貌、人柄も並一通りの雲居雁が、女として幸せな人生を全うしうる唯一の道は、夕霧と結婚することだったというのを、紫式部は示したかったのではないか。入内すること以外にも女性の幸せがある、あるいは入内しない普通の結婚こそが幸福になる場合もあるということを描くために、欠点の多い女性として雲居雁が造型されたのであろう。

結び

雲居雁は、身分は高いものの、それにふさわしい教養、心掛け、嗜み、気品などを十分に身につけてはおらず、容貌も、美人ではあるが人並程度で、格別優れてはいない。それに、嫉妬のあまり夫への手紙を奪ったり、短絡的な考えにより実家に戻ったりするなど、貴族の女性にあるまじき行動を取る。このように、思慮深くなく、心の浅い性格であるなど、欠点も多く、物語世界において理想的女性ではない。しかし、貴族の女性という身分に期待されるものから外れた雲居雁の振舞や態度、自分の感情・考えに従って行動する姿には、庶民の女性や現代の女性に通ずるもの、つまり階層や時代を越えた普遍性を感じられる。雅びやかな平安時代の貴族社会にあっても、男性から多少はしたないと思われようと、自分の感情・考えを主張した女性はいたのではないか。その他、自ら子供達の世話をする場面や、夕霧との夫婦喧嘩の場面を詳しく描かれたりする雲居雁は、『源氏物語』中の貴族の女性の中では、特異な存在に見える。だが、行動的で直情径行型の女性である雲居雁は、現実の女性たちの一面から創り出された人物なのではないかと思われる。また、男性本位の社会通念からは非理想的とされる雲居雁が、夕霧ほどの優れた男性を夫とし、感情の

ままに軽率に行動しても夫から完全に見放されはせず、長い目で見れば幸せな人生を送る。これは紫式部の、男性中心社会に対するささやかな反発ではないだろうか。それに紫式部は、雲居雁を造型することにより、自分の娘などを自家繁栄のために利用する権勢家に疑問を提示した。つまり、当時一般的に、貴族の女性の最高の幸せ・榮譽は、入内して天皇の寵愛を得ることだと考えられていたのに対し、紫式部は、入内せずに臣下である夕霧と結ばれ、その方が幸せだったと思われる雲居雁の人生を描くことにより、女の幸せが天皇の妃になることだけではないということを示したかったのではないか。多くの女性達と競い合い帝の寵愛を得るのは容易ではなく、殊に雲居雁のような女性の場合、夕霧のように優れた臣下と結ばれる方が、更に言えば、そのような結婚こそが、女性として幸せな人生を送ることのできる一つの道であるということを、紫式部は世人に伝えたかったのだろう。それらのことを表現するために造型されたのが雲居雁であると考えられる。

藤壺の宮や紫の上が物語世界の理想の女性であるとすれば、雲居雁は、紫式部にとって、現実存在しうる、親しみの持てる身近な存在、現実的な理想の女性だったのである。

注(1) 日本古典文学大系19『枕草子 紫式部日記』

(昭33・9・5・岩波書店)

(2) 注(1)に同じ。

(3) 池田亀鑑「源氏物語の構成とその技法」(『源氏物語研究』所収・昭45・7・20・有精堂)

(4) 深沢三千男「夕霧巻とところどころ―齟齬と不如意の世界の展開―」(『源氏物語の探究 第十

輯』所収・昭60・10・15・風間書房)

(5) 注(4)に同じ。

(6) 注(4)に同じ。

(7) 注(4)に同じ。

(8) 注(4)に同じ。

(9) 注(4)に同じ。

(10) 注(4)に同じ。

(11) 金子真理子「一夫多妻制のもとにおける妻のなやみについて」昭58・2

(12) 目加田さくを「源氏物語の女性形成」(『源氏物語の探究 第八輯』所収・昭58・6・30・風間書房)

(13) 日向一雅「女性貴族の一日」(『平安貴族の生活』所収・昭60・11・10・有精堂)

(14) 注(13)に同じ。